

【活動紹介】

ノンフォーマルな教育空間創造の試み
ー野殿・童仙房地域をフィールドとして (2)

辻 喜代司

A Practice of Non-formal Education in Nodono-Dosenbo Area (2)

Tsuji, Kiyoshi

京都府相楽郡南山城村野殿・童仙房地域と京都大学大学院教育学研究科（以下、教育学研究科）との連携による教育空間創造の実践について、前稿（本誌 vol.4, 2016）に引き続き報告を行う。

2016 年度は、童仙房区、野殿区とともに新区長の選任があり、それにともない野殿・童仙房生涯学習推進委員会（以下、推進委員会）でも役員が交代し、会長に桜井孝男氏（童仙房区長）、副会長に森嶋徹氏（野殿区長）が就任した。5 月 7 日夜（19:00～20:00）に開催された推進委員会（会場：旧野殿童仙房小学校）では、事務局の提案にもとづき、2016 年度の活動方針（案）と活動計画（案）が了承された。事務局は現在、教育学研究科教育実践コラボレーション・センター（以下、コラボ・センター）内に置かれている。

推進委員会とコラボ・センターが共催する形で、地域と大学の連携によるノンフォーマルな教育・学習事業として、年 2～3 回のペースで、継続的に開催しているのが「野童いなか塾」である。この「地域塾」は、旧野殿童仙房小学校を拠点とした「体験を通じた学びの場」「地域発見・地域づくりの場」「出会いと交流の場」¹となることを目標に掲げ、2010 年度に創案・実施されたもので、現在はそれを継承しつつ発展させる段階にある。

今年度の「野童いなか塾」は、8 月 20 日（土）に開催した「童仙房ミュージアム」と、2 月 18 日（土）実施の「減災懇話会ー水害に備える」で、それぞれ通算 12 回目・13 回目の開催になる。後者は、10 月開催をめざしていたが、あいにく区行事と日程が重なり順延されたものである。本稿では「童仙房ミュージアム」を中心にして、教育空間創造のねらいと成果・課題について報告する。

「童仙房ミュージアム」は、これまで初夏または初秋に定期的実施してきた「自然観察会」をベースにしたものである。旧小学校周辺の里山に自生する山野草を観察・採取する自然体験活動に、採取した素材を生かして「山野草アート」を作成する創作活動とを組み合わせた体験・創作教室として開催した。「ミュージアム」という企画名は、作品づくりだけでなく、それを展示し、相互鑑賞するという活動をめざしたことを示している。参加者は子ども 12 名、大人 14 名（スタッフを含む）、計 26 名であった。

従前の自然観察に相当する時間帯（13：30～14：20）には、これまでと同様、NPO 法人自然観察指導員京都連絡会（略称「ノイ・キョート」）の観察指導員を招き、「採らないほうがよい植物」についての説明をしてもらった。参加者はこのあと、会場に隣接する溪流沿いで、植物の外見的特徴や色彩に関する説明を参考にしながら、採集を行った。

創作活動は、教育学研究科修士1回生の吉原南海さん（生涯教育学講座）の進行で、「地元の丸太（輪切り）で山野草アートを作ってみよう」コーナー（14：20～15：15）として運営した。参加者が、採取した素材を木の台座に接着剤で貼り付けて、それぞれのモチーフを表現する活動である。「地元の丸太（輪切り）」は、推進委員会長の桜井区長によって、童仙房産の丸太をチェーンソーで裁断して提供された。参加者は台座の発する木の香りを楽しみつつ、年輪の描き出す模様を生かしながら創作活動を行うことができた。

「展示コーナー」（15：15～）は、このようにして完成した作品を、玄関ロビーに展示することで、参加者どうしの相互鑑賞の効果をねらったものである。展示方法は、壁掛けが中心であったが、木の枝などで立体的に表現された作品は机上展示にした。この際、参加者に、作品名と氏名を記入してもらう「展示カード」を書いてもらったところ「童仙 BOY」（少年の顔をモチーフにした作品）「アラベスク文様」（花卉による文様表現）「午後のお茶会」など、作品のアイデアを共有できるユニークなものがでて、会場を沸かせた。

この「展示コーナー」と併行して開催したのが、旧図書室を会場とした「モンゴル高原生活展示」である。これは準高原地帯にある野殿・童仙房地域で、モンゴル高原の生活文化を紹介することで、博物館による実物展示の面白さの一端に触れてもらうことを目的としたものである。資料としては国立民族学博物館の「みんぱつく」²を利用した。学校教育での活用で定評のあるアウトリーチ教材を、地域におけるノンフォーマルな学習の活性化のために導入した試みであったが、当日スタッフが「山野草アート創作」の運営で手一杯であったこともあり、十分な活用ができなかった。今後の企画に向けた反省点である。

今回の「童仙房ミュージアム」の成果としては、従来の自然体験活動に、地元の学習資源を生かした創作・展示活動をプラスすることで、「野童いなか塾」の新しい展開の可能性が芽生えたことがあげられる。地元住民のボランティアに参画してもらう運営方法も定着しつつある。また、近年は途絶えていた遠方からの参加（静岡県焼津市）もあり、事前の広報活動が生かされた例としても報告することができる。今後も、学校教育の「はば」を越えるような、ささやかではあるが着実な地域学習の拡充に努めていきたい。

また、2月18日（土）午後の「減災懇話会－水害に備える」は、「地域と大学が共同で知恵を出し合う相互学習」（「推進委員会」活動目標）の場として開催するものであるが、その報告は次稿に委ねたい。

¹ 吉田正純『『いなか』をとり戻す－野殿・童仙房という『教育空間』－』京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センター『円環する教育のコラボレーション』2013年、114頁

² 国立民族学博物館のアウトリーチ教材「みんぱつく」シリーズのうち、「モンゴル 草原のかおりをたのしむ」の貸し出しを受けた。